

ナショナル・アイデンティティの構造*

—ISSP 国際比較調査のデータ解析—

真 鍋 一 史**

1. はじめに—データ解析のねらい—

本稿は、国際比較調査グループ ISSP (International Social Survey Programme) の1995年度の「ナショナル・アイデンティティに関する国際比較調査」の結果について、試験的にいくつかのデータ解析を試みたものである。

まず、ここでのデータ解析の視座について述べておきたい。いうまでもなく「質問紙調査 (Survey Research)」のデータ解析の技法としては、さまざまなものが開発されている。それらがあまりにも多種多様となってきたために、それらを分類・整理しようとする試みも行われている。その一つとして Frank M. Andrews, Laura Klem, Terrence N. Davidson, Patrick M.O'Malley, Willard L.Rodgers, eds., *A Guide for Statistical Techniques for Analyzing Social Science Data* (Second Edition), Institute for Social Research, The University of Michigan, 1981, をあげることができる。この文献は、データ解析のさまざまな手法を網羅的に取りあげ、それらの体系的な分類・整理を試みたものとして高く評価できる。しかしここで採用するデータ解析法の分類の視座は、このような試みとはやや異なる。

(1) 一般に質問紙調査のデータ解析については、つぎの二つの段階を区別することができる。一つは「単純集計」「クロス集計」などの初等的なレベルの手法を用いて調査結果を「記述」しようとする段階であり、もう一つは「スケールやパターン」「多変量解析」などのより高度のレベルの手法を用いて調査結果を「分析」しようとする段階であ

る。

さて、今回の「ナショナル・アイデンティティに関する国際比較調査」については、前者のレベルのデータ解析の試みはすでに辻知広「国への愛着心が強い日本人——ISSP 国際共同調査から——」『放送研究と調査』(1995年6月)として発表されている。そこでは、日本調査のデータに関して、ナショナル・アイデンティティに関する質問諸項目についての「単純集計」(いわゆる「記述分析」)と性別、年齢別、学歴別、職業別、未婚婚別、居住地域別などの「クロス集計」(いわゆる「条件分析」)の結果の一部が報告されている。従って、後者のレベルの分析こそが今回の「ナショナル・アイデンティティに関する調査」についての残された課題といわなければならない。

(2) 以上の二つのデータ解析法のうち、後者に分類された技法は、さらに①質問諸項目(諸変数)の相互間の関係の構造に焦点を合わせ、お互いに似たものどうしをひとまとめにするというように、それらを「分類する」ことが目的となるような技法と、②質問諸項目(諸変数)を独立変数(説明変数)と従属変数(目的変数)に区別し、前者が後者の変動をどう方向づけるかを「予測する」ことが目的となるような技法、に分けられる。では、今回の「ナショナル・アイデンティティに関する調査」については、どちらの技法がよりよいものといえるであろうか。いうまでもなく、データ解析の技法というのは「道具」である。そしてあらゆる道具がそうであるように、そのよしあしは道具そのものの「持ち味」だけによって決まるものではない。道具はどこまでも手段であって、そのような手段のよしあしは特定の目的を設定す

*キーワード：構造分析、因子分析、Smallest Space Analysis

**関西学院大学社会学部教授